とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都杉並区
園名	アスクおぎくぼ保育園

1．活動のテーマ

<テーマ>

～動物の鳴き声は英語ではどうなってるの？～

<テーマの設定理由>

子供たちが動物になりきって遊ぶ姿もよく見られるため、取り入れやすく興味が広がると感じた。

2．活動スケジュール

11 月から 3 月まで行い、月に 1 回ネイティブの講師を招致し他国の文化に直接触れる機会を創出することで深く探究活動ができるようにした。その時点での子どもたちの興味関心をもとに問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにした。

11 月：国や国旗について
12 月：動物の鳴き声を聞いてみよう
１月：いろいろな動物の鳴き声を聴いてみよう
２月：動物の鳴き声を発音してみよう
３月：動物の名前を英語で言ってみよう

3．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

動物の絵カードを用意し、一緒に発音してみたり鳴き声クイズをしてみたりなど遊びを展開させながら興味につながるようにしていった。
「世界のことば あそび絵本」や世界地図のパズルを用意し子どもが遊びながら国についてのことや英語に触れる機会を持てるようにしていった。
絵本を読む際に、動物が出てきたときにあえ英語を使ってみるなど親しみやすいようにしていった。

４．探究活動の実践

【3 歳児実施分】

問いを考える：動物ってどんな声を出すの？と知らない動物も見た目のイメージから想像する姿があった。また、想像したことと実際に聞いてみたものを比べていった。

探究活動の様子： 地図を見ながら”世界”や”国”というものがなにかをわかろうと保育者や講師に質問する姿が見られた。自分たちが住んでいるところが”日本”とわかったり違うところに住んでいる人もいるというころがわかったりしいてきているようだった。クラスで発表会に「おおきなかぶ」をやっていたこともあり、登場する動物の鳴き声を発したりその動物の名前を英語で言ってみたりすることもあった。犬や猫などなじみのある動物であることや英語でも聞く機会の多い動物であることから自然と出てくることもあったようだった。各回、次回に向けての課題があり子ども自身がどうするか考えながら取り組もうとする姿が見られた。

ふりかえり（保育士の気づき）：「すくわく」の時間ではキャストが英語で話すことが多いため、３歳児クラスにとってはなにを聞かれているのか、どうするのかが伝わっていないことが多いように見えた。そのため、子どもがどの程度話を理解していそうか気にかけながら、活動がスムーズに進むように、ときには保育者が日本語で伝えるようにもしていった。テーマが「動物の鳴き声」ということで各回、似たような内容だったので子どもの活動への意欲を高めていけるように「すくわく」のあとにはそのときに行ったことの補足をしたり、プラスして絵本を読んだりかんたんなゲームをしたりなど活動を工夫していくようにした。同じものでも”日本語で” “英語で”と違う言葉で表せるというところが子どもたちにとって難しいポイントになっていたように思う。動物の鳴き声については音であったため、より日本と外国での違いということに気づきづらい内容だった。動物の名称については繰り返していくなかで英語での言い方も覚えていっているようだった。「すくわく」の時間だけでなく英語に触れるように、きっかけがあれば「すくわくのときにやったね、覚えてる？」「これは英語だとなんて言うんだろうね」など機会を持っていけるようにいていった。

【4歳児実施分】

問いを考える： 身近な動物の鳴き声を考えることで合っていた時に喜びも感じていた。それぞれの動物の鳴き声も一人ひとり答える鳴き声が違うところもあり、友達の発言を聞いて想像を膨らませている姿が見られた。

探究活動の様子： 初めはイラストを見て聞かれても英語を初めて聞いた子もいれば何と言っているのか質問の意味をわからない子もいた。保育者が間に入り、日本語で何を聞かれているのか説明すると合っているのかな？と心配そうにしながらも鳴き声を発言していた。はじめの数回は英語の意味が分からずにいたが、何度も繰り返し発言していくことで後半は自信をもってその動物の鳴き声を伝えていた。また鳴き声でも一つだけではなくそれぞれ鳴き声の答え方が違うため新しい発見をする子どもの姿も見られていた。

ふりかえり（保育士の気づき）：子どもたちにとって英語があまり身近なものではない子も多かったためすくわくの時だけではなく日常の中でも「この前のすくわくなにやった？」など振り返る時間を作った。その時は答えていても数日たつと忘れてしまったり「なんだっけ？」と話す子も多かった。そのため一回やって終わりではなくキャストが来てくれるのは月一回だが日常の中でも触れていった。何度か繰り返したり個別に話したり聞いたりすることで少しずつわかってきて、できた時には喜びを感じたりしながらすくわくを楽しんで参加していた。ワークで動物のイラストと英語を見て同じものに線でつなぐことがあった際も保育士が間に入り紙に書かれた英語の意味を伝えたりしたことでどの動物かなどイメージを膨らませて描いていた。またクラスにアルファベットの本をおいたら「これ英語だ！」と嬉しそうに話していて英語が今まで遠かったが子どもたちにとっても近い存在になったと感じている。これからも子どもたちがおぼえてきたことを次に繋げられるようにイラストなど頂いたものを使っていきたいと思う。

【5歳児実施分】

問いを考える： 子どもたちの中でよく触れている動物の鳴き声を伝えてみるものの、外国でよく使われている鳴き声とは別物の動物が多く、違いに驚きながら違いを探す、楽しむ姿が見られる。

探究活動の様子： 子どもたちの住んでいる日本、講師の住んでいる外国の場所を世界地図で確認し、自分たちの国ではこんな鳴き声をしているよねと友だちや保育者と確認するように講師へ伝える。その後、外国での動物の鳴き声を聞き、違いに驚くものの何度か耳にすると覚え、「英語ではむーむーだよね」等と友だちや保育者とやり取りを弾ませる。その後英語での動物の名前、外国での鳴き声を繰り返し発音することで少しずつ身に付き、最後には楽しみながら自分の好きな動物をひとつに絞り、絵を描いていた。

ふりかえり（保育士の気づき）：初めは何を問われているか分からず困惑したり、日本と外国でなぜ鳴き声が違うのだろうと疑問に思う子どもたちもいたが、自分の住んでいる場所と外国は遠いからだ、英語でしゃべるから鳴き声も違うのだと子どもたちなりに考え発言する姿がみられる。回数を重ねると覚えた鳴き声は自分から発表したり、他児と一緒に答えあわせをする等自然と触れられるようになっていた。最後に自分の好きな動物を一匹選び絵に描く際も、鳴き声はなんていうんだっけ？と保育者に確認する姿や、英語で書いてみたいなと発言する姿も見られ、興味が深まっていると感じた。また、ごっご遊びをする中で英語の鳴き声を使ってやりとりが広がっていくようにするなど保育士も一緒に世界に入り込むようにしていった。

MOUSE

Color the Shapes

CAT

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都杉並区
園名	アスクおぎくぼ保育園

1．活動のテーマ

<テーマ>

～音の鳴る仕組みについて～

<テーマの設定理由>

日常生活の中でたくさんの“音”があることに気付いていく中で表現方法の幅を広げていく。また、廃材を使って遊ぶことや、自分たちで考えながら何かをするということが好きな子供たちが多いため、身近なものを使っての楽器作りを行っていきたい。

2．活動スケジュール

11 月から 3 月まで行い、月に 1 回音楽の講師を招致し楽器の演奏や歌声など本物に触れる機会を創出した。また、その時点での子どもたちの興味関心をもとに、保育士と音楽講師と共に問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにする

11 月:オノマトぺってなんだろう？

12 月：いろんな音を聴いてみよう

1 月：実際に楽器を演奏してみよう

2 月：いろんな音の分類分けをしよう

3 月：自分たちで作った楽器を鳴らそう

3．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

「おとがいっぱい」という絵本や「オトマネ」というボードゲームを用意し

ひとつのものからどんな音がしそうか想像していった。

オノマトペビンゴを散歩で持ち歩き、”音”について意識や関心を持てるようにした。

ミュージックパッドや廃材（缶やプラスチック容器）と中に入れるもの（ビーズなど）を用意し

どんな音がするか、音の変化を試していけるようにしていった。

４．探究活動の実践

【3 歳児実施分】

問いを考える：これからどんな音がする？という問いに対して周りの子と同じことを言うだけでなく違う言葉（音）を考えて発言する姿がみられた。楽器の仲間合わせでは「叩く楽器だ」「びよーんってしてる（弦のこと）」など子どもたちなりに楽器の共通点を見つけていっていた。

探究活動の様子：「オノマトペ」ということを知ってから音に関して興味を持つようになり、いまの音は「〇〇だったね」などと話す姿やそれに対して「〇〇って音もするよ」などと会話が広がる様子が見られた。「おとがいっぱい」の絵本を読んだときには自然と本とは違う音も発していったり「オトマネ」のボードゲームでは日常ではあまり見ないようなイラストからもさまざまな音を考えたり思いついたりイメージしてみたりする姿も見られた。楽器作りでは容器に（ビーズなどのもの）をいれていきながら物の違い、量、振り方（鳴らし方）を自分たちで変えていきながら試していく様子があった。また保育者に「大きい音」「小さい音」で鳴らしてみようと声をかけられるとその音が出るようにもしていっていた。手作りした楽器でも鳴らし方、使い方をいろいろな方法で試しながら「これはどう？」「こんな音したよ！」など考えたり気づいたりする姿も見られた。

ふりかえり（保育士の気づき）：ひとつのものから出てくる言葉が多い子どもたちだと感じた。すぐに思いつきなそうな言葉以外によく思いついたなあというような言葉がどんなものからでも出てきてきた。なじみのないものでは言葉が少なくなるようだったのでこれからいろいろなものに触れていく中で言葉が増えていくと思う。楽器作りではある程度、保育者が環境を用意して行っていった。「この容器になにを入れたら音がする？」との問いに対してこちらが予想していたもの以外のものも子どもから出てきたことがあり、柔軟な発想に驚かされることがあった。また、なかには音が鳴らなそうなものあったがなるべく子どもの意見を取り入れながら試せる環境を作っていくようにした。手作り楽器で遊ぶ際には、自由に遊んでいるとものの使い方が雑になったり音が大きくなったりしてしまうことがあったので、音楽をかけてそれに合わせて鳴らしてみることや壊れて使えなくなってしまうことに気づいていけるような保育者の関わりや工夫もしていくことが大切になっていたと思う。

【4歳児実施分】

問いを考える：身普段子どもたちが使っている身近なものからどんな音が想像できるか考えてみた。音楽が好きなクラスなため、風の音は？雨の音は？など言葉が止まらないほどたくさんの言葉が上がっていた。毎回同じものではなく、違うものについて考えていき子どもたちの引き出しが沢山増えたと感じている。その後、様々なもの・音の鳴る楽器に触れて〇〇楽器か考えていった。腱板だからなど子どもたちも段々理解が深まってきていた。最後には自分でものづくりをし音を奏でていた。

探究活動の様子： オノマトペとは何かを知り、身近な物に当てはめて声に出していった。普段言葉にすることは少なかったがすくわく音楽を通して物がどんなふうに鳴るのかを想像してみたり、みんなの前で発言することで周りの子の引き出しも増えていったと感じる。オノマトペシートを子どもの目のつくところにおくとこちらが言わなくても「これオノマトペだ！〇〇だ！」と発言する子が多かった。日常の中でも触れていくことで子どもたちにとっても楽しい内容となり、散歩中にも「これオノマトペだ！」「音がするかも」と反応する子が増えた。すくわくの時間でない時も工作作りが好きな子どもたちは想像を膨らませて作っていた。輪ゴムをつけたら・テープでまいてみたら・この入れ物の中にいれてみたら等やりたいことを各々がしながら完成させ先生に褒めてもらって嬉しそうにしていた。

ふりかえり（保育士の気づき）：オノマトペに触れるにつれ、子どもたち同士でも「これは〇〇だね！」と室内でも戸外でも子どもたち同士で会話を膨らませていた。回数を重ねるにつれて自分の考えだけでなく他の人の意見も取り入れより多くのオノマトペを知っていけたように感じる。また音楽が好きな子どもたちであったため色んな楽器への興味やどんな音が鳴るかをイメージすることが身近になっていた。音を聴きながら動く内容もありただ考えるだけではなく動きながら考えて発言するということで身体を使うことでよりこどもの中に入りやすかったように感じた。この機会を活かし、様々な物に触れる機会を今後もっと増やしていきたいと感じた。

【5歳児実施分】

問いを考える： オノマトペについて初めに触れ、身の回りにあるオノマトペを集め共有する。その後身の周りにある物を使って実際に簡単な楽器を作り、どのように音がなるのか、音のなっているときの物の様子は何かを知り、楽器はどんな種類があるのか触れる。

探究活動の様子： オノマトペという言葉を知らない子どもが多くいたが、実際にどういうものかを知らせると見の周りの生活の中にたくさんあることに子ども自身が気づく。「お部屋の中では〇〇があるよね」「お外に出たら〇〇じゃない？」と子ども同士で気づきを共有する姿も見られた。身の周りにある紙コップに切り込みを入れ、輪ゴムをひっかけ、輪ゴムをはじくことでできた弦楽器では、ただ音が鳴るだけではなく、弦がどのように揺れているか、どんな音がするのかを顔を近づけ観察する姿も見られる。その後、楽器は色々な種類に分類されることを知り、正式名称まで覚え、楽器を分類することも出来るようになり、興味が深い様子だった。

ふりかえり（保育士の気づき）：子どもたちの「なんだろう？」がたくさん見られる機会になり、自分たちで気づいたものをお友だちに共有することで、更にそこから「これもオノマトペだよね？」等気づきが広がる姿が見られていた。「オノマトペ」を覚え、散歩の道中や生活のなかでも「これってオノマトペって言うよね？」等と生活の中に自然と出てくるようになった。身の回りのものを使って楽器を作る際にも、ただ音が鳴ると関心するだけでなく、どこから鳴るのか、弦がふるえていることに気づく等、様々な発見が子どもたち自身でできていると感じた。子どもたち同士で身近にあるものを使って、様々な音を作り出し、楽しむ姿も見られたため、オリジナル楽器での演奏会を行うなどの機会を作っていきたいと感じた。

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都杉並区
園名	アスクおぎくぼ保育園

1．活動のテーマ

<テーマ>

～ボールについて学ぼう！！～

<テーマの設定理由>

普段からよく遊んでいるボール遊びの幅を広げていきたいため。また、ボールについて「どうして？」「なるほど」などの新たな気付きに触れ、探求活動を深めていきたい。

2．活動スケジュール

11 月から 3 月まで行い、月に 1 回体操の講師を招致し身体の動かし方についてこどもたちの前で実演をしたり、探究心を書き立てるような助言をもらった。また、その時点での子どもたちの興味関心をもとに、保育士と体操講師と共に問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにする

11 月：ボールってなんだろう

12 月：自分たちでボールを作ってみよう

1 月：ボールを弱く投げる遊び・強く投げるゲームを考えよう

2 月：いろいろなボールを使ったり投げ方を工夫したりしてみよう

3 月：ボールを使う遊びになにが必要か考えよう

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）
ボールを作るための廃材やテープ類の準備をした。
ボールの力加減が必要な遊びとしてボッチャで遊んだ。
サッカーをするためにゴールを準備した。
野球（ボールを打つ遊び）のためにプールスティックやラケットの代わりとして
段ボールを用意した。
ボールの違いを知るために、大小様々なボールを使っていった。

４．探究活動の実践

【3 歳児実施分】
問いを考える： ボールってなんだろう？という問いに対して擬音で答える子もいれば形や色を答える子、遊びを答える子などさまざまだった。
探究活動の様子： いろいろなボールを知るところでは空気のないボールを触ったり転がしたり落としてみたりしたあとに空気を入れたボールで同じことを試したことによりその変化や違いに「硬くなったね」「とんだ（弾んだこと）」など話す様子があった。またそこでボールには空気が入っていることを知った子もいたようだった。ゲームや遊びにボールを取り入れていくとボールの動きをよく見たり強く・優しくと力の入れ方を変えたりしていく様子もあった。また保育者のやっているところを見てまねしたり気づいたりすることもあり、試してみる姿もあった。日々の保育の中でも「できるかも？」と子どもたち同士でボールを使った遊びを考え、試したりしながら、幅を広げていく様子があった。
ふりかえり（保育士の気づき）：ボールってなんだろう？に対しては想像できることが多かったが、どんな遊びができるか？というところでは新しく考え付くということは難しかったように思う。ボールを知るというところではボール作りや空気を入れたことは子どもの気づきが多い活動になったように感じた。遊びは保育者が提供していったが、その中では大きいボールと小さいボールのどっちを使ったほうがいいかや力を強く弱くするかなど問いをわかりやすくすると子どもたちから考えてみたり思ったこと話したりしながら活動を進めていくことができた。ルールを工夫することでボール遊びの中での「コントロールをする」「力加減」などねらいを持った活動にしていくことができた。３歳児には「サッカー」「野球」「バスケ」といったようなものを行うには難しいが、それらをできるようになるための動きや運動というのはいまからでも取り入れてくことができると感じた。

【4歳児実施分】

問いを考える： ボールであそぶものは何だろうと質問するとはじめはドッチボールしかでてこなかった。ボール遊びが好きだがボールについて改めて触れて考える機会はなかったためすくわくを通して他には何があるのか考えようとすることが増えた。ちいさなボールや大きなボール、ボールの数が変わるだけでさまざまな考えが出てくるようになった。

探究活動の様子： ボールとは子どもたちにとってドッチボールをすることは頭にあったが、他のものはあまり意見が出てこなかった。講師が少しヒントを出したりいろんな遊びを教えてくれる中で徐々に子どもたちからもいろんな意見が出てくるようになった。ボールのやさしい投げ方・強い投げ方はどうしたらそうなるのかを考えてみたり、また次に繋げて実際にやってみるなどの経験を通して子どもたちの投げ方も変ったように感じた。（ドッチボールが好きで強く投げることに意識が向いていたクラスだったため）徐々に「ふわあん」と言いながら投げるなどの声も上がり考えたことを素直に遊びの中で取り入れていた。

ふりかえり（保育士の気づき）：身体を動かすことが好きなクラスだったためはじめは楽しくなりすぎるところもあったがボールの使い方（強く・優しく）などを考え、それをやってみるということで楽しみながら行っていた。的を用意したりゴールを決めて行うことでただ楽しく投げるではなく、ボールにも変化がついて面白いと味わっていた。日常の中でも「これはすくわくでやったよね！」「的当てやりたい！」と言う子も多くただおもいきり投げるではなく色んな投げかたがあるから面白い、また子どもたちにとっても新しい発見を感じることができていた。自分一人では知らなかった考えを知る機会ができ考えてやってみようと挑戦する気持ちが芽生え良いなと感じた。

【5歳児実施分】

問いを考える：ボールがなにか改めて考え、ボールはどんな形か、どんな時に使われるかを考える。そのうえで小さなボールを地面に落とすとどうなるか、投げるとどうなるか、大きなボールを蹴るとどうなるか気づきを共有する。その後、小さいボール、大きいボールを使ってできる遊びをグループで考え発表し、実践する。

活動の様子： ボールって丸い形だよね、ゲーム遊びをする時に使う、大きいボールは〇〇の時につかう、小さいボールは、、と子どもたちが気づいた事を次々に共有する姿が見られた。小さいボールはキャッチしづらいけど、大きいボールはやりやすい等色々な角度から気づく姿が見られた。グループワークでは、「これは小さいボールだとやりにくいよね？」「これだと難しいかなあ」と自分たちの意見を言い合い、１つずつのゲームを考える事ができた。実践の日になり、小さいボールでは中あて、爆弾ゲーム。大きいボールではサッカーを行う。どちらのボールも使い、なんで小さいボールは蹴りにくいんだろう等自分で考え、発表し共有する姿が見られた。

ふりかえり（保育士の気づき）：体操のすくわくではより身近で分かりやすかったのか、子どもたちからの気づきが多く出たように感じた。普段行っているゲーム遊びから連想させ、どんな時にどんなボールを使って遊べるか自分たちで意見を出し、実際に行ってみてどう思うかなど共有することができており、更に日常での遊びが自分たちで考え展開できるようになったと感じた。また、自分のクラスだけでなく、「ちいさいこたちだったらこんなことができるかも」等の発言も見られたため、異年齢の関わりの中で一緒に遊べる機会などを持ち、さらに探求活動を深めていきたいと感じた。